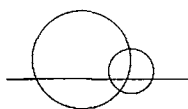


〔お披露目会〕



## 東亜同文書院大学記念センター「リニューアル・オープン」

2008年9月27日

【司会】 それではただいまから講演会に入りたいと思います。講演会に先立ちまして主催者側の愛知大学長からご挨拶を賜りたいと思います。よろしく願いいたします。

【佐藤】 皆様こんにちは。愛知大学の佐藤でございます。本日は愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示室、それから大学史展示室のリニューアル・オープンということで、お披露目の会を主催しましたところ、このように大勢の方にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。大学として今回のリニューアル・オープンを心から喜んでおりますと同時に、皆様にお集まりいただきましたことを心から感謝申し上げます。先ほどのテープ・カットの際にセンター長の藤田教授から説明がございましたけれども、今回の整備、リニューアルにつきましては2006年度、文部科学省学術研究高度化推進事業のオープン・リサーチ・センター整備事業というプロジェクトにセンターが申請をし、採択されたことがきっかけになっております。私立大学がさまざまな形で文科省から補助金を得ることがあるわけですが、センターが受けた補助金につきましては、競争的な資金であることに加えて、施設設備の建築建設、こういったものに補助金が使えるところが特徴的でございます。その点は通常の研究補助金とは少し性格が違い、これに採択されたことによって、約2年かけて整備をすることができたということです。

さて改めて申し上げるまでもないことですが、

愛知大学にとって、あるいは愛知大学のブランド形成にとって、東亜同文書院はなくてはならない存在でございます。東亜同文書院という前身があつて今日の愛知大学もあるということで、その関係について、あるいは前身である東亜同文書院について、やはり大学の関係者だけではなく広く社会にご理解をいただき、そういう機会をもっともっと増やしていきたいと考えております。その点でも今回のリニューアル・オープンは非常に意義深いものであると了解しています。

本日は後ほどご講演いただく殿岡様、あるいは木全様、このお二方にもずいぶんご協力をいただきましてこの講演会を開催することができました。お二方には大学を代表して改めてお礼を申し上げます。併せて今後、これも後ほど説明があるのかも知れませんが、「友の会」というものを結成いたしましてセンターをさらに盛り上げていく、そういう予定でございますので、こちらのほうにつきましてもぜひ地域の皆様にご協力いただければ、というふうに考えている次第でございます。

このような場で私事にわたるのはあまり適当ではないかと思いますが、実は私は東亜同文書院にゆかりのある山田兄弟と同じ出身地（青森県弘前）でございます。7月下旬、弘前において東亜同文書院関係の展示会と講演会を開催いたしました。当時学長代行という立場でございましたけれども、駆けつけてご挨拶を申し上げる機会を得ました。

それからこれもある意味ではどうでもいい話な

のかも知れませんが、学長に就任いたしまして先般霞山会のほうに伺い、近衛会長様、山田理事長様、それから山下事務局長様にご挨拶をいたしました。山下事務局長様には実は5年前に1度お世話になったことがありまして、まさか霞山会の事務局で再会するという事は当時は全く考えておりませんでした。5年前、外務省の関係でパプア・ニューギニアに赴き、パプア・ニューギニアの国会議員とか大学生向きに講演をしたことがあるんですけども、その時のホストが、当時パプア・ニューギニアの大使をされていた山下様でした。パプア・ニューギニアの大使をされていた方と霞山会で再会をするなんていうことは露ほども考えておりませんでしたので、これも何かの縁なのかなと、そんな感じがしております。今後東亜同文書院、あるいは霞山会、そういったところとさらに関係を深めながら愛知大学の発展を考えていきたい。そんな気持ちを新たにしているところでございます。

ルーツとしての東亜同文書院等々について在学生が知る機会を、これまで大学としてきちんと整備してきたかと言うと、おそらく充分ではなかったというふうに考えています。大学史という授業が2006年あるいは2007年から設けられ、その一環として、受講生が今日皆さんにご覧いただいた展示室を見学するという事はなされているんですけども、これはあくまでも受講生だけでございますので、愛知大学の学生全員が愛知大学とはどういう大学だったのか、愛知大学のルーツとは何かといったことを考え、理解する機会がなかったというのが正直なところだと思います。その点で私自身はやはりそういった機会を、愛知大学の学生全員に提供したいと考えている次第です。

昨今の愛知大学の中ではどうしても名古屋新校舎のことが話題になりがちでありますけれども、やはりルーツとしての豊橋校舎、あるいは私は敢えて「正史」と申し上げますけれども、正史としての豊橋校舎の発展があつて、新しい名古屋校

舎の展開もあるというふうに理解しておりますので、今後もこの豊橋校舎の発展ということ、これは最低限進めなくてはならないと感じております。そのことと併せて、やはり学生全員がこの展示室を見学し、愛知大学の拠って立つところを理解しておく、そういう機会をぜひ設けたいと思っております。これもおそらく皆さんのお力を借りなくてはならないだろうと思っておりますので、その辺のご協力もこの機会にお願い申し上げておきたいと思っております。

長くなってしまいましたけれども、個人的にも先ほど申し上げましたような関係がございますので、本日のお披露目の会をたいへん喜んでいただいております。以上をもちまして私の挨拶させていただきます。どうもありがとうございます。

**【司会】** ありがとうございます。続きまして藤田センター長からのご挨拶です。お願いいたします。

**【藤田】** ただいまご紹介いただきました愛知大学東亜同文書院大学記念センター長の藤田と申します。先ほどもテープ・カットの時に挨拶いたしました。それに今学長から記念センターに対しても非常にご理解のあるご発言をいただき、大変嬉しく思っております。そういう点ではなるべく重複しないようにしてお話を進めさせていただこうと思っております。

今回こういうお披露目の会を開けるようになったプロセスは、先ほど学長がおっしゃったように、文科省のオープン・リサーチ・センターのプロジェクトに選定していただいたことで、一気にわれわれのほうもここまで盛り上げることができました。とりわけ本学の学生諸君に、先ほどお話がありましたように書院を、さらにはそれに関連した愛知大学史を物でみせる、形で見せるというチャンスが今までありませんでしたので、これを機

会に見せられるというのが1つで、もう1つは東亜同文書院というのは確かに愛知大学のルーツになった重要な大学なんですけど、また本学の大学史だけの問題ではなくて、今から約100年前、1901年上海に設立されたということ自体、半世紀続いて非常に多くの事業をこの東亜同文書院および東亜同文書院大学は蓄積してきた。とりわけ日中関係にいろんな意味で果たした役割が大きいという点で言いますと、本学の枠を超えた世界的な存在でもあります。

本学がやはり文科省から認定された大きな事業であるCOEのプログラムで、私もヨーロッパの各大学を回ったことがございますけれども、各大学は東亜同文書院と言うとすぐ分かってくれます。言ってみれば世界的に知名度のある名前なんですね。しかも歴史的な名前でもあります。愛知大学というのはなかなか直接には理解してもらえないんですが、東亜同文書院の名前を出しますと、その後継大学ということですからすぐ対応をしていただけるんです。おそらくそれがなくて愛知大学だけでしたら、なかなかヨーロッパでもアメリカでも、各大学はそう簡単にはいい関係を結ぼうという話には乗らなかったと思うんですけども。東亜同文書院というのは世界的なレベルでも知名度があり、そういう点で多くの方々に関心を持っている世界的な存在として研究対象にもなってきたことを考えますと、東亜同文書院は大学の中、および国際的なところでつながりを持った、今の言葉で言いますと1つの重要な「キーワード」的な存在であると言えます。

そういう意味でこの東亜同文書院大学記念センターを充実させることで、私の考えでは世界的な研究の中心拠点としても、本学がしっかりとその軸を定めていくことができたらいんじゃないかなと考えております。去年は中国の方々とのシン

ポジウムをいたしましたけど、来年は欧米の人達と交えた国際シンポジウムを考えております。世界的な存在感というものを浮き彫りにしながら、この豊橋の地を拠点として発展していきたいものです。視野は広く、それと同時に地域にはいろんな博物館、美術館、資料館等がございますので、それはそれで連携をしながら、地域の方々にもこの展示を通してお互いに交流ができないだろうかということで、「友の会」というのをこれから発足させていきます。ミクロスケールからメソスケール、さらにマクロスケールまで、ちょっと欲ばっていますけれども、そういう形でこの東亜同文書院大学記念センターがうまく発展できたらいいなと考えております。本日こういう形で皆さん方にもお披露目できるところまでようやくたどり着きました。今後ともご理解ご協力をいただけたら大変ありがたいと思っております。

この後、お二人の講師の先生方にお話しいただきますけれども、殿岡さんからはお父様の本間学長先生のお話を通じて愛知大学の創設期のお話が伺えると思っております。併せて先ほど申しましたようにこの記念センターの建物、その他いくつかの木造の建物が今愛知大学に残っていますが、ちょうど100年目なんですね。100年目を記念しまして、ゆかりの深い木全先生にも今日は奈良から来ていただきました。先生は奈良国立文化財研究所にお勤めになっておられました。それから地元豊橋東高校のご出身ということで、地元にも縁の深い方でございます。このお二人のお話の中で思いを広げていただければ光栄かなと思っております。せっかくの今日の時間ですので楽しみながらお話をお聞きいただければ幸いです。そういうことで私のご挨拶とさせていただきます。どうも失礼いたしました。

・・・友の会発足・・・

【司会】 ありがとうございます。ただいま藤田先生からもお話がございましたけれども、記念センターは現在、「友の会」を発足します。そこで「友の会」の世話人の方々にただいまから委嘱状を交付させていただきたいと思っております。それぞれの博物館名、資料館名等をこちらで読み上げさせていただきますので、壇上にお上がりください。代表者にセンター長から委嘱状をお渡しいたしますので、よろしくお願いいたします。

それではただいまからお名前を呼ばさせていただきます。豊橋市美術博物館様、豊橋市二川宿本陣資料館様、小坂井町郷土資料館様、豊橋市自然史博物館様、御油の松並木資料館様、豊川地域文化広場桜ヶ丘ミュージアム様、豊川市中央図書館様、田原市博物館様、蒲郡市博物館様、新城市設楽原歴史資料館様、設楽町郷土資料館様、東栄町花まつり会館様、長篠城址史跡保存館様、社団法人豊橋青年会議所様、豊橋観光コンベンション協会様、豊橋鉄道様、東愛知新聞社様、東海日日新聞社様、豊橋市南栄校区総代の塩沢様、豊橋市町畑町の石垣様、豊橋市弥生町の杉浦様、豊橋市南栄の水口様、豊橋市南栄の吉田様、以上23名の方に世話人をお願いしております。本日諸事情でお見えになられていない方もおられますが、壇上に上がられた方に愛知大学東亜同文書院大学記念センターの「友の会」の世話人をお願いしたいと思います。代表して豊橋市美術博物館の後藤様に委嘱状を受け取っていただきます。

【藤田】 今日は皆様方ご苦労さまです。ひとつよろしくよろしくお願いいたします。では委嘱状を読ませていただきます。「豊橋市美術博物館殿。あなたを愛知大学東亜同文書院大学記念センター友の会の

世話人として、共に地域文化の向上を果たせるよう委嘱させていただきます。2008年9月27日、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、センター長藤田佳久。」以上です。どうぞよろしくお願いいたします。

【司会】 ありがとうございます。よろしくお願いいたします。代表以外の方につきましては今日交歓会終了後、委嘱状をお渡ししたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。それでは大変お待たせいたしました。ただいまから講演会に入りたいと思っております。初めに「娘から見た学長本間喜一と愛知大学」ということで殿岡さんにご講演いただきます。殿岡さんは皆さんご承知のように本間喜一学長のお嬢さんでありまして、長年愛知大学の創設期のことをよく聞いておりますし、また愛知大学のことについてもいろいろなお話をお聞かせいただけるんじゃないかと楽しみにしております。それでは殿岡さんよろしくよろしくお願いいたします。

## 委 嘱 状

殿

あなたを愛知大学東亜同文書院大学記念センター「友の会」の世話人として、共に地域の文化向上を果たせるよう委嘱させていただきます。

2008年9月27日

愛知大学

東亜同文書院大学記念センター  
センター長 藤田佳久